

区 潔萍（オー ケッペイ）

中国出身

筑波大学 人間総合科学研究院障害科学専攻 博士課程

父と私

両親は個人経営の建設業を営んでおり、建築現場でかなりの重労働を長年続けてきた。父はとても仕事熱心で、祝日や天候が極端に悪い日、或いは体調を崩したとき以外、滅多に休まない人だ。私の幼い頃から、父は無口であまり自分のことを喋らないというイメージだったが、私が成長する中の大事な時期に、数少ない「説教」を通して私に大きな影響を与えてくれた。

私の家は私と弟の二人姉弟で、いつも長女の私のほうが厳しく育てられてきたように思う。進学先の中学校を決める時、私は家から少し離れた中学校に進学したかった。ところが、小学校時代には私の勉強に全然興味関心を示してくれなかつた父が急に、「行きたいなら、一番良い学校を目指せ」と言ってきた。結局、2 番目くらいに良い学校に合格したのだが、私のそれからの人生は当時の父の言葉から大きな影響を受けはじめたのだ。中学校は寄宿生活だった。初めて家を離れ、寮生活を始める日、父は私を一人だけで学校に行かせようとしていた。いくらそこに独立させようという思いが込められていたとしても、もし母が心配して「仕事を休んで学校に連れて行ってあげたら」と言ってくれなかつたら、家から 30 キロ以上離れた学校に一人で行かされたかもしれない。

中学校や高校時代も、父との関係はあまり親しくなれないままであった。大学は実家から 300 キロ離れた広州に就学し、年に 2 回くらい帰る程度で、合わせても 1 年に 3 ヶ月ほど実家で過ごせるかどうかだった。それでも、(大人になったせいか) だんだん父のことが理解できるようになった。父は自分もそういう家庭環

境で育てられてきたのだろう。真面目で責任感の強い父が、家族にも仕事の仲間にも責任を持っているから、私たち姉弟を言葉よりも行動で教え導いたのだ。

今年の 1 月下旬に、久しぶりに実家に帰った。なんと帰国した翌日に武漢が封鎖された。実家で 10 日ほど滞在し、祖父母の家に挨拶に行った以外、殆ど外出しなかった。2 月 1 日には日本に戻る予定だったが、それまでの毎日は居ても立っても居られなかった。1 月 30 日に WHO が「緊急事態宣言」を出した。

日本に戻れないのでないかと母は心配していた。その翌日に、予定通り実家を出発した。父は私に「もし具合が悪くなったら、自分から空港の検疫所に報告しなさい。症状がなくても、必ず家で 2 週間自主隔離して」と伝えた。当時の日本は、薄々緊張感が高まってきたが、14 日間の隔離はまだ要求されていない状況だった(日本に戻った後、大学からは「自宅待機」の指示があった)。それでも、私は自然に納得できた。父に言われなくとも、当然そうするよう決めていた。

いま考えると、幼少期から今まで実家を離れた場所で生活した時間が多く、両親と暮らした時間がとても少なかった。私は小学校 3 年生になるまで祖父母(母方)と暮らしていた。日本に来てからは、よほどの用事がない限り父にあまり連絡していないので、父と私がだんだん疎遠になっていくような気がしていた。しかし、今回コロナの事態で、両親のことが心配で自然にメッセージなどのやりとりが増えた。時々、家で撮った写真を送ってくれたりしている。多分、父も私と同じように、お互いにコミュニケーションできる方法をずっと模索して

いたのかもしれない、今は 3,000 キロも離れた日本にいる私が思ったのである。



父が送ってくれた庭のリュウガンの実